傷ついた神戸 癒やして20年

神戸ハーバーランドの神戸情報文化ビル内にある「神戸新聞松方ホール」が今夏、20周年を迎える。阪神・淡路大震災から１年余りの1996年９月に開館。復興途上にあった神戸のまちに新たな文化の灯をともし、まちの復興・再生に貢献してきた。これまでクラシック演奏会を中心にさまざまなプログラムを実施。今年９月には20周年記念コンサートを開く。

神戸新聞松方ホール開館20周年

阪神・淡路大震災の翌年開館
芸術の力で復興支える

旧国鉄湊川貨物駅跡地などを再開発して生まれた神戸ハーバーランド。神戸新聞社は本社を三宮からハーバーランドに移す構想をまとめる中で、社屋内に高質な音楽ホールを設け、地方紙として地域社会の新たな文化ニーズに応えることを計画した。

開館に向けて準備を進めていた1995年1月17日、阪神・淡路大震災が発生した。神戸市全体の中ではハーバーランドの震災被害は比較的軽微であり、建設中の新社屋に大きな異状はなかったが、三宮の本社ビルは全壊。企業として苦境に陥ったばかりでなく、多くの尊い命が失われ大勢の人々が住む場所を失った状況を前に、文化活動推進構想は一時中断した。

しかしその後、震災で傷ついた人々を癒やす芸術の力が再認識され、この経験を地元メディアとして受け止め、芸術・文化を振興する方向で先導的な役目を果たすことが求められていると判断。各方面から寄せられた見舞金を活用し、ホールの管理運営主体となる財団法人「神戸新聞文化財団」を設立した。質の高い音楽演奏会の開催▽地元の音楽家への演奏機会提供▽新進音楽家の顕彰、育成プログラムの推進▽芸術に関心を持つ読者が交流する拠点と機会づくりーなどを運営の基本方針とした。

ホール名は、世界的な美術収集家でもあった神戸新聞社初代社長、松方幸次郎の名にちなみ「神戸新聞松方ホール」に。「文化の国際交流によって日本文化の発展・向上を果たしたいと情熱を燃やした幸次郎の精神を受け継いでいきたい」という願いを込めた。

優れた音響 CD録音も

完成したホールは、最良の音響効果を発揮するシューボックス型で706人を収容。内部に自然木をふんだんに使い、音響効果を最も重視した。その響きの良さを愛するクラシックファンは多く、演奏家からの評価も高い。これまで何度も国内外の著名アーティストのCD録音会場として利用されてきた。

海辺に立地することから、内装は波をモチーフにした内壁、星空をイメージした天井照明など自然を意識したデザイン。ホワイエは海に向かう壁一面をガラス張りのサンテラス風に仕上げ、自然光をたっぷりと取り入れている。ホワイエ西側の屋外スペースには船のデッキをイメージしたテラスデッキがあり、開演前や幕あいに潮風を感じることができる。

同ホールでは、良質の芸術をリーズナブルな価格で提供するため、全国の新聞社や各地域の音楽ホールとネットワークを形成し、海外のオーケストラの自主招へいや独自プログラムの企画に取り組んできた。新進音楽家を顕彰する「松方ホール音楽賞」も開館以来続けており、優秀な音楽家を多数輩出している。

松方ホールの音響を確かめる弓張さん。心地よい響きは多くの演奏家やクラシックファンに愛されている

松方ホールの魅力を聞く

音の反射 徹底的に追求

音響設計者　荒木　邦彦さん

あらき・くにひこ　竹中工務店技術研究所で音響を研究し、設計部でホール設計を担当。梅田芸術劇場、伊丹アイフォニックホール、神戸朝日ホールなどを設計。定年退職後、ホール音響のコンサルティングを行う「音響デザイン研究所」を設立。

数多くのホールを設計したが、松方ホールは自分でも満点をあげたくなるほどの仕上がりだった。

神戸新聞社から「未来永劫（えいごう）使える素晴らしいホールを」という注文を受け、クラシックに対応できるホールを提案。設計に先駆けて、施主と設計・施工の両者で海外のホールを視察し、議論を重ねた。

音響シミュレーションシステムを使ってホールを設計し、工事途中で実際に音を出して確認しながら造るのが自分のやり方。松方ホールの場合も7割ほど工事が進んだ段階でプロの演奏家に中で実際に演奏してもらい、最終調整した。

ホール1階の後ろの壁には小さな穴が開いた吸音板が使われている。かつてはホール後方の壁は吸音が常識だったが、そうすると演奏家が自分の音の跳ね返りを聞けず、演奏しづらくなる。松方ホールではいったん吸音板を取り付けて響きを聞き、吸音しない方が良い響きを得られることが分かったため、吸音板の下にもう1枚ボードを入れて音を反射させることにした。それが多くの演奏者に好まれる現在の響きにつながっている。そのほか、ステージの床にも音響効果を高めるための特許技術を使うなど、細部までこだわり抜いた。

形で音を作っている希少価値の高いホール。席が変われば響きも変わる。ぜひお気に入りの「マイシート」を探しながら、音を楽しんでほしい。

美しい響きに包まれる

ピアニスト　弓張　美季さん

ゆみはり・みき　神戸生まれ。幼少期から欧米で才能を培い、海外を拠点に活躍。国内外でソロリサイタルを開くほか、オーケストラとも共演。ベルリン在住。

ここ10年ほど、ほぼ毎年、神戸新聞松方ホールでリサイタルを開いている。10代でプロデビューして以来、国内外のいろんなホールで演奏してきたが、ソロのピアノがこれほど美しく響くところはない。

ホールで音楽家が演奏する際に一番大切なことは、舞台上で良い音、自分が心地良いと思う音を生みだすこと。松方ホールでは、舞台上で演奏者自身が美しい音楽を感じる幸せを味わえる。観客席で「良い音をしているよ」と言われても、弾くのはあくまで自分なので。

音の返りはホールによって違うし、客席の状況によっても変わってくる。このホールでは、ピアノを弾いていて「ちょうどいい音響」を感じられる。

プロの演奏家でも、響きや楽器が敵に回ると演奏しづらくなり、表現したいことができなくなってしまう。反対に、心地良い響きを持ったホールで演奏すると、美しい響きに抱きしめられているような感覚になり、ホールが演奏を手伝ってくれていると感じる。松方ホールはそういうホールだ。

観客としても何度も来たことがあるが、どの席に座っても音がいい。ホールに入る前のガラス張りのホワイエの雰囲気、そこから眺める景色も大好き。海外生活が長いですが、神戸はホームタウン。大好きまち・神戸にあるこのホールで演奏できることを毎回幸せに思っている。